

「ターナー者である柴崎^{しばさき} 敏^{さとし}さんは、現在、繁殖牛を約35頭飼育されている。専門畜産農家ですが、本町に来られた当初は巻き網漁船の乗組員でした。柴崎さんが、畜産農家へと転職したきっかけ、また、畜産業に対する思いなどお話を伺いました。

大阪在住の51歳の時、「自分の時間を大切にしたい」という思いから、それまで働いていた大阪の会社を辞め、本町へ移住すること決意しました。

来島当初は漁業に従事しながらも、生き物が好きだった柴崎さんは、空き時間に山に出かけ、馬の餌やりなど行っていました。そんな時、地元の農家さんに「そんなに好きなら牛でも飼うか」と話しかけられ畜産に興味を持ち始め、繁殖牛3頭から飼い始めました。

そして5年後、体力的に漁師を続けることは難しいと考え、本格的に牛を飼うことを決め、牛舎建設の準備に踏み切りました。

“牛たちへの畏敬の念”

畜産業を営む上で、忘れてはいけないことがあると柴崎さんは言います。

「牛たちに畏敬の念を持って接する事。それが大前提。畜産農家は、子牛の命を誕生させ、子牛を売ることを商売に

して生活をしている。そして買われた先で子牛は肥育され、最終的には、人間が命を頂くのだから。だからこそ、生まれて手元にいる半年くらいの子牛をおもいつきりかわいがってやる。」

牛は経済動物と言われますが、柴崎さんの思いを聞き、改めて命の大切さを感じる事ができました。

“新しい時代への思い”

「この土地へ来て、色々な人に世話になり、自分なりに有益な時間を過ごす事ができた。今後は次の世代に畜産業を繋げていくことができたらと思う。」と柴崎さんは言われます。

放牧場の整備、新規就農者への支援、教育現場での子牛の飼育体験等、今回、色々なアドバイスを頂きました。

柴崎さんの言葉にあるように「次の世代へ繋げていく」ため、今後、関係者の方々と取り組みを検討し、次世代へのパトנטタッチを実現していきたいと思えます。



専門畜産農家 柴崎さんの1日

6:00	7:00	9:00	12:00	PM	17:00	20:00
牛舎で準備	餌やり	牛舎内の掃除 獣医さんの検診 種付け 等	昼休み	牧野の見回り 牛の安否確認 発情期予定の牛の確認	餌やり	



餌やり



牛舎内の掃除

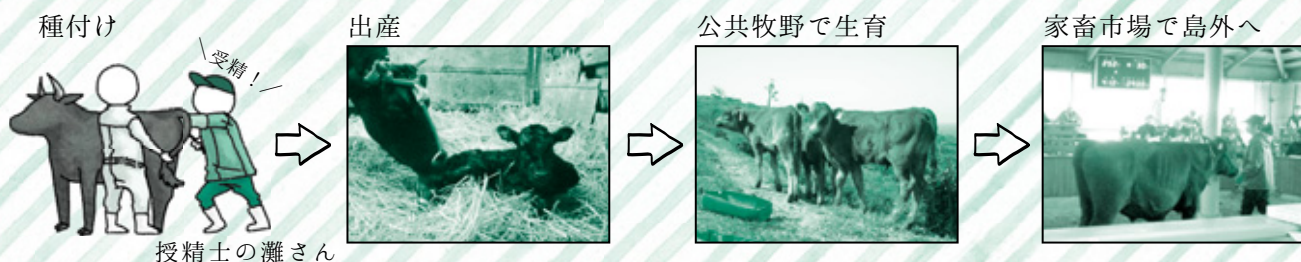


牧野の見回り



*馬も飼育しています

西ノ島の繁殖経営の流れ



平成17年に一から牧場会社を設立し、現在では約70頭の多頭飼育を行っている合同会社いざなぎ牧場。若いIターン・Uターン者の受入れも実施している近藤武夫代表をはじめ、平成22年より同社に入社した奥本晃さん、昨年4月に神奈川県から移住し、同社へ入社した川口恵子さんの3名にお話をお伺いしました。

「若い力が一番大事」



合同会社いざなぎ牧場
代表 近藤武夫さん

平成17年当時、全国的に公共事業が減少傾向にあり、土木事業の先行きは不透明になってきました。土木事業を営む近藤武夫代表は、「経営を考えた時、一番簡単なのは従業員を切ることだが、この島にいと従業員の家庭も見える。」との理由から新しい事業を立ち上げることを決断し、試行錯誤の末、平成18年にいざなぎ牧場を設立されました。設立当初17頭だった繁殖牛も現在では、約70頭となりました。

今後の畜産業を考えるうえで、放牧場の整備や農家への支援策等、検討していくべき課題は多いが、やはり若者の力が大事だと近藤代表は言います。

「いざなぎ牧場は、今後を見据え、若い従業員を採用している。多頭飼育は、体力的に非常にハードな仕事であり、若いメンバーでしか増頭の可能性はないと思っている。まずは繁殖牛100頭の目標をクリアし、その後を検討していきたい。」

そう話す近藤代表からは、従業員に対する期待と信頼が感じられました。

奥本さんは、高校生まで牛をまともに触ったこともなかったそうです。しかし、島根県立農林大学校で勉強するうちに牛の奥深さに引かれ、仕事として考えるようになり、卒業後は隠岐の子牛の大口購買者である中国牧場に入社しました。「隠岐の子牛を最後まで見られる。それを勉強するため中国牧場を選び、隠岐の牛の魅力を知ることのできる気が強くなった。」

いざなぎ牧場では、場長となり、牛舎の管理を任せられています。

責任ある立場で経営を考える奥本さんに、今後の抱負を訪ねてみました。

「まだ理想には近づけていないが、購買者に喜んでもらえる牛を作りつづけること。そして市場に新規購買者が増えることを願っています。自分達だけでなく、購買者が儲けないと意味がないですから。」

奥本さんの言葉には、近藤代表の言われる「若い力」を感じました。



「購買者に喜んでもらえる牛作り」

おくとみ 晃さん

「放牧という牛にとって健康的な環境に魅力を感じる」



川口 恵子さん

川口さんは、神奈川県出身で東京農業大学を卒業後、たまたまインターネットでいざなぎ牧場の募集を見て応募し、昨年の4月に入社されました。それまでは、隠岐に来たこともなく、独特な放牧スタイルも入社して初めて知り、戸惑うことも多かったそうです。

しかし、子供の頃から動物が大好きで、実家の近くの観光牧場へよく遊びに行っていたという川口さんは「一日歩いて牛を探す」放牧も苦にならないと言います。そして、不便なところも含め離島での生活はとても魅力的で「山菜とかワラビとか結構取りにいきますよ」と笑顔で話してくれました。

「ゆくゆくは、自分の元で牛を飼いたい」「放牧という牛にとって健康的な環境が好きですね。他の地域だと牛舎に詰められますから。」

隠岐の牛の足腰の強さ、寿命の長さの要因である放牧の魅力に引かれ、「今後、この島で牛を飼っていききたい」と未来の展望を語ってくれました。